

第46回 全日本中学生水の作文コンクール
和歌山県入賞作品集

水について考える

和歌山県

いあいさし

水は、あらゆる生命の根源であり、私たちの暮らしや産業活動を支える限りある貴重な資源です。近年では、世界的な渇水や洪水が頻発し、水利用の安定性、安全で良質な水資源の確保が重要な課題となっています。

こうしたことから、国においては、水を共有の財産と位置づけるとともに、健全な水循環の重要性について、国民の理解を深めるため、毎年八月一日を「水の日」と定め、様々な関連行事が行われています。

和歌山県では、この一環として、中学生を対象に、昭和五十四年から「全日本中学生水の作文コンクール」の和歌山県審査を実施しており、本年は、七五九編もの御応募をいただきました。

いずれも、「水について考える」というテーマにふさわしく、日常生活の経験を通じて学んだ水の大切さを表現したものや世界の水資源問題について考察したものなど、様々な視点から水について考え、水への想いが表現されたすばらしい作品ばかりでした。

これらの中から、入賞作品十八編をこのたび作品集にまとめました。家庭や学校で御活用いただき、水への関心をさらに深めていただくことを願っています。

令和六年八月六日

和歌山県地域振興部長 赤坂 武彦

もくじ

優秀賞

より良い未来へ

僕の大好きな水辺の町

きれいな水を守るために

入選

日本の水はすごい

米のための水のリレー

水が支える食卓

へビトンボのいない川

一滴の水が変える

和歌山県立向陽中学校

二年

田口 怜愛

・
・
・
1

田辺市立大塔中学校

二年

田中 伸乃丞

・
・
・
3

和歌山県立向陽中学校

二年

南村 安紀

・
・
・
5

橋本市立隅田中学校

二年

大久保 葵生

・
・
・
7

和歌山県立向陽中学校

二年

阪口 ころろ

・
・
・
8

和歌山県立向陽中学校

二年

高岡 那々星

・
・
・
9

和歌山県立向陽中学校

二年

藤田 時

・
・
・
10

和歌山県立向陽中学校

二年

山田 美羽

・
・
・
11

水の有り難さを知って

和歌山県立田辺中学校

三年

合川

芽依

・
・
・

1 2

着衣水泳での学び

和歌山県立向陽中学校

二年

井本

絢音

・
・
・

1 3

未来を創るのは私たちだ

和歌山県立田辺中学校

三年

加藤

千愛

・
・
・

1 4

水への感謝、忘れていませんか。

和歌山県立向陽中学校

二年

河本

乃空

・
・
・

1 5

私たちができること

和歌山県立向陽中学校

二年

久堀

優衣

・
・
・

1 6

次世代への贈り物

和歌山県立向陽中学校

二年

白倉

悠成

・
・
・

1 7

水と共に歩むために

和歌山県立向陽中学校

二年

田中

花佳

・
・
・

1 8

いつもの川

和歌山県立向陽中学校

二年

玉置

凜音

・
・
・

1 9

川を守るために

和歌山県立田辺中学校

三年

正木

寿佳

・
・
・

2 0

ジュースの蛇口が欲しい

和歌山県立田辺中学校

三年

湯川

あづ

・
・
・

2 1

(掲載順序は五十音順です。)

優 秀 賞

より良い未来へ

和歌山県立向陽中学校 二年

たぐち れあ
田口 怜愛

「めちやくちやきれい……」
思わずこぼれた一言。そこには、遥か高くから流れる那智の滝があった。

私は、小学校の修学旅行で和歌山の紀南地方を訪れた。一日目の終わり、那智の滝へ向かうことになった。那智の滝は、日本を代表する二つの滝に数えられ、世界遺産にも認定されている名高い滝だ。落差は百三十三メートルと、日本一を誇る。それまでは正直滝なんてただ上から水が落ちてくるだけだと思っていた。しかし、那智の滝へ続く階段を降りていくにつれ、だんだん空気が

違っていく。私はそれに少し緊張しながら階段を下り切り、那智の滝を前にした。すると、その迫力満点で力強い姿に目が釘付けになった。滝の流れる音は凄まじく、本当に何もかもが澄んでいった。心地良い水しぶきで、今までの疲れが全部吹き飛んだような気がして、とても心が安らいだ。この時私は、水の美しく雄大な景色に圧倒され、ひどく心を打たれた。それと同時に、ただの滝だなんて思っていた自分がとても恥ずかしくなった。

修学旅行から帰ってきてからも、あの素晴らしい水の景色を思い出しては、もう一度見たいと考えていた。そこで、家の近くの川も同じように綺麗だろうと思いい、ワクワクしながら見に行った。しかし、そこで目にしたのは水が緑色に濁って、いくつものごみが流れている川の姿だった。その時、私ははっとした。あんなに美しい水を自分たちが汚してしまっているのだと。また、水に関する授業を受けた時には、水が有限であることや、水が不足して苦しんでいる人、亡くなってしまおう人がたくさんいることを知った。私は、それまで何となく水は無限にあるものだと思っていた。そのため、有限だったという事実にとっても驚いた。また、水が不足して苦しんでいる人の話を聞いた時にとっても胸が痛んだ。そこで、水不足問題を解決するにはどうすれば良いのか調べてみた。すると、普段使う水を最小限にして節水したり、生活排水を極力

綺麗にすることなどが大切だと分かった。この問題を少しでも解消できるよう、調べたことを実行したりして、水をもっと大切に使っていこうと思った。

水は、人間にとっても他のすべての生き物にとっても生きていく上では絶対になくってはならない貴重な存在である。水が汚れてしまうと、そこに住めるはずの生き物が住めなくなってしまう。私が感動した美しさも感じる事が出来なくなってしまう。ましてや、地球から水がなくなってしまうなんてことになる。すべての生き物は絶滅してしまう。そんなことは想像もつかないかもしれないが、水は無限にある訳ではない。そんなすべての命を支える柱となっているかけがえのない水。それをこれからも守っていかなければならないと、この経験を通して改めて実感できた。そのためには、私達一人一人が水を守ろうという意識を持つこと、それに向けて自分に出来る対策から始めることが大切だ。ごみは川などにポイ捨てしない、水を出しっぱなしにしないなど、当たり前のことを徹底していくだけでも、私たちにとって今よりもっとより良い未来が待っていると思う。私はこれからも、貴重で美しく、ありがたい水を大切に使っていこうと思う。

優 秀 賞

僕の大好きな水辺の町

田辺市立大塔中学校 二年

たなか しんのすけ
田中 伸乃丞

突然ですが、みなさんの周りに水辺はありますか？僕の周りには、水辺が多くあります。中学校の前の河川敷には、水辺の楽校という公園があります。

僕は、何よりも、どんな場所よりも、この水辺が大好きです。川のせせらぎ、木々の揺れる音、沈む夕日、夏に泳ぐ川そのすべてが「好き」です。

僕は、小さい頃からこの水辺の近くで過ごしてきました。いろんな虫を捕まえたり、おたまじゃくしを見つけて、育てたりするのが好きでした。でもなぜか最近までは、身近にあるこの水辺自

体に特別な思いはありませんでした。身近だったということが大きいかもしれません。そんな僕に転機といえるかどうかは分かりませんが、その素晴らしさに気づく機会が訪れたのは、小学校最大のイベントの修学旅行で他府県に行った時です。ふと一息ついたとき、きれいな川、いつもの風景が見たいと思いました。僕は、この時初めて地域の水辺の素晴らしさに気づきました。

水辺の素晴らしさに気づいた時から、いくつも良いことがありました。それをいくつか紹介していきたいと思います。

一つ目は、今までは、見ようとしなかった季節の変化に気づけたことです。春は桜、夏は、セミの鳴き声、川の流れる音、秋は紅葉やすすき、冬は、減多に降らない雪に染まる木々、季節の移り変わりが楽しみでそれを両親に、

「桜が咲いたよ。」

「もうせみが泣き始めたよ。」

などというのがとても楽しみです。そんな季節の移り変わりをしている日々の生活の中でちよつと落ち込んだ時、水辺の風景を見ると明日ももう少し頑張ってみようという気持ちになります。

二つ目は身近にある美しさを友達と一緒に感動し合えたことです。小学六年生の頃友達と一緒に「いつもの場所のさらに上流に行ってみよう」と二人で出かけました。そこで僕達が目にした

のは、岩々の間を激しく流れる水。あの光景は、今でも鮮明に覚えていますが。自分の足で辿り着いたあの景色は絶景でした。自分の足でなにかを見つける素晴らしさに気づきました。その友達とは、今でも時々一緒に川の流れや、そのきらめきを見て、「きれいだね。」

などとお互いに思わずつぶやき合っています。

三つ目は、友達といくつもの思い出をつくってこれたことです。その一つとして挙げられるのが、昨年、毎日毎日川に行ったことです。それは、僕にとっては毎日が宝物でした。肌に触れる水の感覚。それは今でも鮮明に覚えています。みんなでナマズを見たことは今でも話題の中心に上ります。僕を含め友達は初めて見るナマズに大興奮でした。

「実際にいたんだ。」

と、友達は驚きの声を上げていました。それは今でも忘れられない思い出となっています。

近年、環境破壊が問題になっていますが、こんなにも人にとって憩いの場、思い出の場となるこの水辺を僕は後世に残していきたいです。いつか自分が大人になったとき子どもと一緒に水辺の公園を散歩し、川を泳ぎたい、そんな夢が最近僕の中にはあります。

この水辺を守るために、自分たちの中学校では、水辺の楽校プロジェクトという取り組みを行っています。この水辺の公園をさらに活用し、保全していくための取り組みを中学生で考えています。昨年度は、大塔行政局でプレゼンテーションを行い、ごみ拾いや、メダカの保護に取り組み計画を提案しました。本年度より実行していく予定です。大好きな水辺の公園の保全に関わっていることをとても嬉しく思っています。また、自分自身、普段から帰り道でゴミを見つけたら拾うなどして、環境美化に努めていきたいと考えています。

みなさんも近くの水辺に目を向けてください。きっと、その素晴らしさに気づけるはずです。

優 秀 賞

きれいな水を守るために

和歌山県立向陽中学校 二年

みなみむら あすみ
南村 安紀

私はアウトドアが好きで、よくキャンプに行きます。以前、家族とキャンプに行ったとき、キャンプ場の方と少し話しました。その方が、最近土砂災害が多いのは、整備されていない保水力の落ちた森林が増えたからだ、とおっしゃっていました。また、昨年「川の学校」という川キャンプのイベントに参加したとき、ゲストの方から、ダムを造ると川が濁る、という話を聞きました。私は、なぜダムを造ると川の水が濁るのか疑問に思い、人工ダムについて調べてみました。

人工ダムを造る目的はいろいろあります。「洪水調節」「水資源

の確保」「発電」「流水の正常な機能維持」などです。黒部ダムのように、電力不足を解消するために建設されたダムは当時、とても人々の役に立ったと思います。しかし、現在は当時と比べ、ダムはそれほど必要とされていません。そのうえ、ダムはためている水を放流するとき、同時に土砂やヘドロなども放流するので、水質汚染に繋がります。

人工ダムによる環境破壊の解決策として「緑のダム」が注目されています。緑のダムは、地下に降った雨水を蓄える働きがある森林のことです。緑のダムのメリットは土砂が流れにくいので、川の水をきれいに保つことができるという点です。また、きちんと整備されている森林は保水力も強く、ある程度の洪水であれば防ぐことも可能です。しかし、間伐などがきちんと行われておらず、整備が十分でない森林は、たくさん雨が降ったときなどに土砂崩れを起こしやすくなります。最近、地球温暖化などの影響でゲリラ豪雨が増えてきているので、森林の整備を進めなければ、土砂災害が多発し、被害が大きくなると考えられます。

今の日本の山には、スギやヒノキなどの針葉樹林が多く植えられています。そして、それらの木は背が高く、中は暗くなっています。つまり、手入れがあまりされていません。そのような密植されている森林は、中低木や下草が生えないので、腐植土が少な

くなり、保水力が落ちること、土砂崩れが起きやすくなります。しかし、きちんと間伐を行い、森林の中に日光が当たるようになれば、中低木や下草が生えるので腐植土が多くなり、保水力は向上すると考えられます。

私は小さい頃、父の会社の植林活動に参加したことがあります。木が少ない山に新しく木を植えて、森林を広げ、緑のダムをたくさん作っていくことが、川の水をきれいに保ち、きれいな水を海に流すことにも繋がります。しかし、現在は植林などの活動をする人が少なく、都会の大きな企業だけがしています。これから、地元の企業や国家が協力して活動を広げることができたらいいなと思います。

川や海のきれいな水を守るために緑のダムは重要です。緑のダムを作るためには、植林活動をするだけでなく、今ある森林の手入れが必要不可欠です。だから、私は、治水のために山に人工ダムを作るためではなく、森林の手入れをして緑のダムを作るために費用をかけてほしいと思います。これから私は、緑のダムを増やすために、できるだけ多く植林活動に参加したいです。そして、多くの人にその活動を広めていきたいと思っています。

日本の水はすごい

橋本市立隅田中学校 二年 大久保 葵生
おおくぼ あおい

朝起きて、朝食を食べ、歯を磨くときに僕は当たり前のように水道の蛇口をひねる。水が出なかった日はない。顔を洗う、トイレを使う、手を洗う、お風呂に入るなど、水は日常に欠かせないものだ。日本に住んでいる人は皆、このような生活をしているだろう。何の疑問も持たずに。だが何の心配もなく水道から出てくる水を飲んだり、使ったりできるのは世界でたったの十か国程度である。アジアでは日本のみ、ヨーロッパでは、オーストリアやアイスランド、デンマーク、フィンランドなどの国である。僕はこの事実にとても驚いた。水道水を飲めるのは決して当たり前前のことではないのだ。世界には百九十七もの国があるのに、なぜ先進国を含む多くの国で水道水を飲むことができないのだろう。それにはいくつかの理由がある。気候変動による地球温暖化の影響、産業の発展で水の使用量が増えたことや開発による水源破壊などが原因の水不足、不衛生な水質環境、水源の不足、インフラの未整備などの理由である。

日本の水はなぜ安全できれいなのか？その理由は僕が調べた自由研究からわかった。

水道水から、塩素消毒しているプールと同じ匂いがしたので、水道水にも塩素が入っているのかどうか気になった。そこで、水道水、川の水、ミネラルウォーターなど身近にあるものを調べた。結果、水道水にしか塩素は入っていないかった。原水となる水には病気の原因となる微生物がたくさんいる。それを殺菌力が強い塩素で消毒しているので水道水には塩素が入っているのだ。僕はいつ塩素が入ったのが気になり、浄水場に行ってみた。浄水場では、着水井というところで水の流れを整え、次亜塩素酸ナ

トリウムで消毒を行っているそうだ。また、蛇口での残留塩素濃度を一リットルにつき〇・一ミリグラム以上、〇・四ミリグラム以下に保持することが法令で定められている。この範囲内の濃度であれば、人体に悪影響はない。したがって僕たちは安心して水道水を飲むことができる。また、研究の結果から塩素濃度は温度の影響を受けることもわかった。実際、塩素の量は季節によって調整されている。夏であれば塩素の効果が薄くなってしまっているので、冬よりも多く含まれている。このように日本の水道水は厳しく管理されている。浄水場が三百六十五日、二十四時間稼働しているおかげで、僕たちは毎日安全な水を使える。どれだけ水道水がしっかりと管理されているのか、また、水道水がどれほど貴重でありがたい物であるか僕は痛感した。

これからもきれいな水を使い続けるにはどうすればよいだろうか。日頃から取り組めることはたくさんある。油汚れを紙で拭き取ってから洗い流したり、みそ汁や麺類などの残りを流したりしない。川にゴミを捨てない。毎日の生活の中で少し工夫するだけでも水をきれいに保つことができる。

豊かな水資源に恵まれ、水質管理も厳重な日本のような国は世界でも少ない。一方で、日本は災害の多い国でもある。地震、津波、土砂災害など、僕たちはいつ被災者になるかわからない。だから、断水が起きて水道水が使えなくなった時のために、水を備えておかなければならない。一人当たり一日三リットルの水が必要だと言われている。ただし、これは健常者の場合であって、病気や障害を持っている人の場合は、さらに多くの水を必要とするかもしれない。僕自身も水を備えている。ことが起きてから慌ても遅い。これは日本だけでなく、世界中の人々が意識しなければならぬことだ。人間は水が無くては生きていけないのだから。水は無限にあるわけではない。無駄に使うと将来的に枯渇してしまう。水に恵まれた環境に感謝しながら、水を無駄なく利用していくことが大切だと思う。

米のための水のリレー

和歌山県立向陽中学校 二年 阪口 こころ さかぐち

私は米が好きだ。そんな私の家には水田がある。そこでは毎年、私の祖父が米を育てている。5月頃になると私の祖父は「田んぼに水を引いてくる。」と言って出かけていく。私は、「水を引く」っていうのはどういうことなのだろうと不思議に思い祖父に聞いた。すると祖父は「近所の田んぼからみんな協力して水を受け継いでくることだ。」と教えてくれた。私はこのとき「水を受け継ぐ」というのは水というバトンを受け継いでいくものだと思った。だから「水のリレー」のようだと思った。

ある年に私の祖父が「今日来るはずなのに水が来ない」と言っていた。詳しく聞くと、どうやら川にためていた水が近所にある他の田んぼまでの分しかなく、私達の田んぼにまで水が届いていないということだった。私はこれに驚いた。田んぼに水がこないと米が育たないことを知っていたからだ。水が足りなくなったのはなぜだろうか。気になったので、次の日に川を見に行こうと思った。

次の日、その川に行くと水が全くなく川の底が見えていた。これはその年の水を溜める期間が少し短かったということ、そして雨があまり降らなかったことが原因だった。私は今まで雨なんてジメジメして服も濡れて嫌なことばかりだと思っていた。しかし、この日以降、雨には川の水を増やしたり大地を潤すという大切な役目があり、これがないと私達は生活していくことができないのだと知った。このまま雨が降らなかつたら米が育たない。そう焦っていたとき、天気予報で来週雨が降ると知った。

それから一週間後、本当に雨が降った。私にとってはとてもうれしい雨だった。私の祖父も喜んでいはずだと思った。だがそうではなかった。

なぜなら思っていた以上に雨の量が少なかったからだ。それもそのはず。雨が降ったのは一日限りで、川に水を溜めるのは不可能だった。それを知って私も驚き悲しんだ。「今年は米を作れないのか。」とも思ったほどだった。

それから数日後。「水が足りない。」と悲しんでいた矢先のことだった。私にとってその時一番喜ぶことができる知らせが耳に入った。この日からしばらく雨が続くとのことだった。

それから何日かが川には、田んぼに水が引けるほどの水が溜まっていた。これでやっと米づくりのスタートラインに立つことができたのだ。

その後は例年のように苗を植え、米が育つまで大切に世話をした。9月下旬。ついに米を収穫する季節になった。雨が少なく、「今年は米を収穫することができないのではないか。」と思っていたが、無事に収穫することができた。この米はすごく美味しかった。

雨には悪いイメージしかなかった私にとって、この年は雨の大切さを改めて実感できる年になった。これからも美味しい米を食べるためにも、雨に感謝して生活していこうと思う。

水が支える食卓

和歌山県立向陽中学校 二年 高岡 那々星

たかおか ななせ

「おいしいねえ。」と言葉を交わしながら食べる夕食。こうして、いつでも食事をする事ができるのは誰のおかげでしょうか。普通なら、「農家さん」「調理する人」などと答えるはずですが、農家の方や調理する方が、野菜を作ったり食材を調理できるのは、一体何のおかげでしょうか。それは、「水」のおかげなのです。

私の家の周りには、畑や田んぼなどが広がっています。畑の野菜には水をやる必要があります。田んぼには水を張る必要があります。野菜は水がなければ育たないし、稲は水がなければ枯れてしまいます。以前、雨が全く降らない時期があり、地面がひび割れ、野菜が枯れてしまいそうになりました。そのときは、慌てて水をやり、なんとか野菜が枯れることは防ぎましたが、水の大切さを改めて思い知りました。

野菜や稲だけではありません。魚は水がなければ生きていけないし、牛や豚、鶏などにも飲み水は必要です。また、それらの家畜の食べ物であるトウモロコシや穀物の栽培にも水が使われるため、実際には大量の水が必要になります。環境省のウェブサイトで調べてみると、牛肉一キログラムを作るのに必要な水の量は、なんと約三千六百万リットルだとわかりました。これを知ったとき、私はとても驚きました。何も考えずに食べているハンバーグなどに、これだけの量の水が使われていることを知ると、改めて「食べ物を残したり、廃棄したりするのはやめよう」と思いました。また、具体的な数字を見ることで、「牛や豚、鶏も生きていて、私達人間はその命をいただいているんだ。」という実感が湧き、より一層食べ物に感謝して食べよう、という気持ちになりました。

さらに、食材を調理するときにも、水は必要不可欠です。食材を洗ったり、煮たりするときにも、水をたくさん使います。以前、私が住んでいる地域で断水が起り、少量の水しか使えなくなったときがありました。おにぎりやコンビニエンスストアのお惣菜、冷凍食品など、水をあまり使用せずに調理できる料理を食べていたのですが、同じものばかり食べていると、だんだん飽きてしまいました。何日かたつと、やっと水が出るようになり、普通の食事ができるようになりました。久しぶりに飲んだ温かいおみそ汁の味、これはどんな食べ物よりもおいしい食事だと思います。

このように、水は、様々な場面で世界の食卓を支えています、おいしい食事は目に見えますが、その食事の原材料の生きる源となった水の姿は目に見えません。「水は、食卓を支える『縁の下の力持ち』」この言葉は、食卓を陰から支えてくれている水にぴったりの言葉でしょう。普段生活しているだけではあまり意識することがないですが、これからは、この言葉を胸にしまい、毎日おいしい食事を食べることができるといふ日常に感謝し、日々過ごしていきたいと思えます。

「いただきます。」「ごちそうさまでした。」今も、日本中でこの言葉が使われています。これらの言葉は、食材や、食事を作る過程に関わった人々への感謝の気持ちが込められています。これからは、食材や、食事を作ってくれた人だけではなく、水や、きれいな水を「作って」くれた人々にも感謝の気持ちを持って、「いただきます。」「ごちそうさまでした。」と言おうと思えます。「水は、食卓を支える『縁の下の力持ち』」私たちが食事することができるのは、水のおかげだから。

へビトンボのいない川

和歌山県立向陽中学校 二年 藤田 時ふじたとき

「へビトンボだ。」聞いたことのない言葉が川に大きく響いた。兄が声を出したところに向かってみると、鎧のような殻を背負った短いムカデのような虫が岩の上に佇んでいた。

私の両親は大のアウトドア好きで、私が小学生の頃は一ヶ月に二回程度の頻度で毎回違うキャンプ場に向かっていった。キャンプ場につくと親が色々とテントの組み立てやご飯の用意をしているので一時間ほど親を手伝って、その後川で兄と生き物採集をする。キャンプ場には必ずといっていいほど川が近くにある。魚が多い川、かにかが多い川、そして稀に珍しい生き物が取れる川もあり、そういう川では不思議な生き物がたくさんいた。しかし、その生き物は図鑑でも見たことのないものだった。

龍のように長い胴体、何でも砕いてしまいうような顎の牙。私はこの生き物の虜になった。今すぐにでも捕まえて、親にこの生き物を自慢したくなつたが、つかもうとするとギザギザの顎の牙で指をはさもうとしてくる。必死の思いで捕まえて、兄に詳しく聞いたところ、このかっこいい生き物はへビトンボの幼虫であることがわかった。溪流に棲む水生昆虫で、体は細長く、頭部は頑丈で顎が強く発達している。

私が一番気になったのは、この生き物はよほどきれいな川でないと生息していないという点だ。これまで私は二十本程度の山奥の上流の川で生き物の採集を行ってきたが、この生き物を捕まえたのはここが初めてだった。さらに調べてもらおうと、「へビトンボ」の幼虫は環境省によって定められた四段階に分けられる水質階級の中で最も階級が高い「きれいな水」の川に

しか生息しておらず、限られた環境でのみ生息することができ、かつ、環境変化に敏感で影響を受けやすい「指標生物」であるということがわかった。少し悲しい気持ちになってしまった。私達人間はこういう生き物こそ調査や研究をしたがるのに、自らの手で生息地を減らしているのだ。この矛盾に私はどうも納得できなかった。

三週間後また別のキャンプ場に行つて川の生き物の採集を行ったがそこへビトンボの姿はなかった。いるのはサワガニや小魚だけだった。河原にはどこどころごみが散乱している。なにかできることはないかと考えた結果、私にできるのはごみ拾いだけだった。兄や両親も手伝ってくれた。

こころなしか少しだけ川がきれいに見えた。「この川でもへビトンボを見れたいいな。」そう思いながら、私はこのキャンプ場をあとにした。

私は川が好きだ。川は私達に水や魚といった、たくさんのお恵みを与えてくれる。しかし、私達はそれを仇で返すように川をごみで汚してしまう。私達は川の水にお礼を言うべきではと思う。「ごみを拾う」「川のこころを今よりもっと知る」「外来種を放たない」お礼を言う方法はいくつもある。一人ひとりが川の大切さや水の大切さに気づき、へビトンボの住めるきれいな水を未来に残せるように考えていく。水を当たり前のように使えるが、水がないと生きられないこの日本で生きていく中で、とても大切なことではないかと私は思う。

一滴の水が変える

和歌山県立向陽中学校 一年 山田 美羽

やまだ みほね

「水は六億年後になくなるかもしれない。」この言葉は私にとってとても衝撃的だった。水がなくなるってどういうことかわからない。でも六億年後だと私は絶対に生きていない。だから私には関係ないなんて思っていないだろうか。私がこれを聞いた時はそう思っていた。蛇口をひねると当たり前に出てくる水。私が小学生の頃、先生に水の大切さを教えてもらった。その時に先生が言っていたのがその言葉だ。またその先生は「一滴の水を大切にしないさい。今水を節約すればするほど未来が良くなる」とも言っていた。当時の私は一滴ならいいのとほぼ同じだから意味がないと思っていたので水について深く考えていなかった。だから何も考えずに水を出していた。

蛇口をひねると当たり前のように出てくる水。蛇口をひねっても水が出ない生活を送ったことがない私にはその水の使えない生活がどれだけ大変で辛いか全く想像がつかなかった。しかし、今から三年前、私が小学五年生の頃私が住んでいる和歌山市が断水になった。紀ノ川にかかっている水道橋が崩落したのだ。次の日蛇口をひねってでてきたのは少量の少し濁った水だった。水の使えない生活。お風呂も入れない。食器も洗えない。トイレもいづもどおりにはできない。そんな大変な生活を送ったとき、私は初めて水の大切さを知ることになった。たった一滴の水なのにその一滴がいつもの数倍価値が高く感じた。その時先生が言っていた「水を大切にしないさい」の意味がわかった気がした。水が復旧して、初めに飲んだ水はいづもの倍美味しく感じた。

たとえ六億年後の世界に私がいなくても、私達ではない誰かが暮らしているかもしれない。私達の遠い遠い親戚が暮らしているかもしれない。もし本当に今水を節約して未来が少しでも変わるなら私はそのために水の節約を積極的にしていきたいと思う。水を節約するといくつかのメリットがあることもわかった。例えば、洪水や水不足を防いだりすることができる。これ以外にもメリットは色々ある。

蛇口をひねると水が出る。今の日本では水を使いたい時に蛇口をひねるだけでほしだけの水を手に入れることができる。その当たり前のことがこれからもずっと続くように小学校の先生に言われたことを胸に水の節約をしていきたい。ちよつとだから、一瞬だからといって水を出しつづなにする。その一滴が未来の水の状況を変えるかもしれない。たった一滴の水が未来を良くすることもあれば、たった一滴だけで悪くなることもある。日本中の人が一日に一滴無駄にすれば一億滴以上の水を無駄にしたことになる。一日に一滴でも節約すれば一億滴以上の水を節約したことになる。手を洗うとき、お風呂に入るとき、食器を洗うとき、こういう小さなところから少しずつ節約をしていくことがとても大切だということをこの断水を通して学んだ。私は一滴でも多くの水を節約し、この一滴を大切にしながらこれからも水についてたくさんの方のことを学んでいきたいと思う。

水の有り難さを知って

和歌山県立田辺中学校 三年 合川 芽依 あいかわ めい

もし今、水道が止まってしまったら私たちの生活はどうなるのでしょうか。いつも蛇口をひねると勢いよく出てくる水。それが使えなくなるとどれくらい不便なのか、連休なので良い機会だと思い、私も実際に一日間体験してみることにしました。

朝起きて、トイレに行くとき昨日の風呂の残り湯を流すことにしました。少しの水では流れなかったのですが、バケツ一杯分くらいの水を一気に流す必要があったのですが、水を使いすぎて無駄にすることはできないので、その調節が難しかったです。歯磨きには、家に置いてあった歯磨きシートを、洗顔には顔拭きシートを代用しました。また、喉が渴いてペットボトルの水を飲むとしたとき、断水したらこんなふうに惜しみなく水を飲むことはできないんだと思い、はっとさせられました。ご飯は水を使わず料理できるものにし、紙皿と割り箸を使ったり、食器にラップを敷いたりして食べるようにし、洗い物が出ないよう気をつけました。手が汚れたら、できるだけアルコール消毒やウェットティッシュを使用しました。洗濯もできず、お風呂にも入れず、何だか気持ちが悪かったです。

私は今までも水を大切に使うと心掛けてきたと自分では思っていますが、無意識のうちに生活の中で何度も蛇口に手を伸ばしていて、まだまだ水に対する意識が足りなかったことを思い知らされました。そして、水のない大変さや不安、普段当たり前のように使ってしまったている水の有り難さを身に染みて感じました。

一日体験しただけでこんなに不便だったのに、もし災害が起きて何日間も断水になってしまったらとても耐えられないと思います。しかし、今年

に入っただけにも地震が発生しました。元日に起きた熊登半島地震です。今も四千六百人余りが避難生活を強いられており、計三千七百八十戸で断水が続いているとニュースで聞きました。私の父は消防士で、瓦礫に挟まれた人たちなどの救助のため被災地に向かいました。父によると、断水のためトイレは排泄物が流せないのが非常に汚く、清掃もできないから、行かなくていいように水分を全くとらない人も多かったそうです。水道が止まる辛さを知ったと言っていました。私は生まれてからこれまで、自分の住む地域で断水を経験したことはないですが、災害はいつ起きてもおかしくないのだから自分ごととして考えなければならぬと思いました。

多くの人は、蛇口から安全で安心して飲めるおいしい水が出ることの有り難さを忘れてしまっていると思います。私も、水道を使わない生活をしたり、父から話を聞いたりするまでは、水や、それが私たちに届くまで関わっている仕事をしてくれている人たちへの感謝の気持ちを持っていませんでした。

しかし、これからはその有り難さや感謝を忘れません。水をこまめに止めたり、再利用したりなど、身近で簡単にできることはたくさんあります。小さな力かもしれませんが、その積み重ねが大きく未来を変えることになると思います。

着衣水泳での学び

和歌山県立向陽中学校 二年 井本 絢音

いもと あやね

これは着衣水泳をしていた時の話です。

「重っ！」

私は思わず声に出してしまいました。

私は小さい頃から水泳を習っていました。そこで着衣水泳があり、私も参加することになりました。服を着たまま水の中に入るといって、いつもと全然違う感覚でした。水着と違ってとても重く、前に進むもうと思っても全然前に進みません。二十五メートルを泳ぐだけでも、いつもよりずっと長い時間がかかりました。普段の練習なら、前にいるあの子に追いつくはずなのに、あの子よりも速く泳げるはずなのにと思い必死に泳いでも、ただ疲れるだけで全然追いつきませんでした。私は普段着ている服がいかに泳ぎにくく、水着がいかに泳ぎやすいか、そこで初めて分かりました。

着衣水泳では、泳いでみるといっただけでなく、ペットボトルを使って浮く方法を教えてもらいました。ペットボトルを抱えて動かずじっとしていると、溺れずに浮かんでいられるというものです。これはペットボトルを受け取ってからは浮かんでいられたのですが、私は一回では投げてもらったものを上手く受け取れませんでした。そして、もう一度別のものを投げてもらいました。私は室内プールで水の流れもほとんどない状態でしたが、「これが川だったら私は今、どこにいるんだろう」と思いました。もしかしたら、もう一度投げてもらうことはできないかもしれないと思うと、なんだか助からない可能性が急に増えるような気がして水の怖さを感じました。

着衣水泳で教わった一番大切なことは、「こういう状況になったときには、

無駄な動きをせず、じっと浮いて待つこと」です。動いてしまうと逆に良くないと教わり、小学生の頃の私にはすごく印象に残りました。私は、いつもなら動けば動くほど進むので、たとえ服を着ている時でも、頑張って泳いだほうが早く岸にたどり着けると思っていました。でも実際はそうではなく、それを今でも忘れずにずっと覚えていきます。

日本では残念ながら川などの水辺の事故で亡くなってしまふ方がたくさんいます。生活に欠かせない、こんなに身近にある水が人の命を奪ってしまうのです。私は、そういった水辺の事故に巻き込まれたときにどうすればいいのか、分かっていたほうが助かる可能性が高くなると思います。着衣水泳は小学校などで行われていたりするので、体験したことがある方のほうが多いと思いますが、そこで教わったことを忘れないことが大切だと思います。

私の住んでいる和歌山県には川がたくさんあり、私が通学に使っている電車からも川が見えます。小学校の時、川の良さについて調べることもあり、川が比較的身近にあるからこそ、川や水辺での事故は少なくなっていると思います。水辺の事故に巻き込まれる時は、普通の服を着ていて、普通の靴を履いているということのほうが多いと思います。だから、私はこの着衣水泳の体験を忘れずに、この経験での学びを活かしていきたいです。

未来を創るのは私たちだ

和歌山県立田辺中学校 三年

加藤 千愛 かとう ゆきな

一九六一年四月十二日、旧ソビエト連邦が、ユーリ・ガガーリン少佐を乗せた宇宙船の打ち上げに成功しました。大気圏外で地球を一周し、無事に帰還。人類史上初となった有人宇宙飛行は、打ち上げから帰還まで、百八分間でした。当時二十七歳の彼は帰還後、宇宙からの眺めについて「空は非常に暗かった。一方、地球は青みがかった。地球はよく見えた」と述べました。日本ではのちに「地球は青かった」という言葉で広く知られるようになり、人類の名言の一つとして語り継がれています。この有人宇宙飛行の成功から半世紀以上の年月が過ぎ、宇宙から見た青く美しい地球の姿を写真や映像で簡単に見ることができるようになりました。この青色の正体が水であることは周知の事実です。「水の惑星」と呼ばれる地球の表面の約7割は海洋に覆われています。地球上の水の総量は約十四億立方キロメートルと推定されており、そのほとんどが海水です。もちろん、海水を飲み水や生活用水にそのまま使うことは出来ません。私たち人間が利用できる淡水でも、その多くは南極や北極の氷や氷河として存在している水や地下水です。そして、地球上の水は、太陽のエネルギーによって蒸発し、上空で雲になり、やがて雨や雪となって地上に降り注ぎます。地球上の動植物はこの循環する水の恩恵を受けながら暮らしているのです。

私の暮らす日本は周りを海で囲まれ、地球上の多くの国の中でも水資源の豊かな国ですが、私たちが使う水は無限に存在しているわけではありません。環境に配慮した行動を心がける中で、貴重な水資源を大切に使うという意識は持つていると頭の中では理解しているつもりです。しかし、蛇口をひねると綺麗な水が出てくるので、出てきて当たり前という感覚があ

るということも事実です。私たちの快適な生活は、水に関わる多くの方達の知恵や努力によって支えられています。水について調べる中で、生物化学的酸素要求量という指標を知りました。生物化学的酸素要求量はBODとも呼ばれ、水の汚れ度合いを表す指標のひとつです。水の汚れは水中の微生物からすると栄養分で、微生物も生きていくために栄養分と酸素を必要としています。BODとは、微生物が水の汚れを分解する時に使う酸素量のことです。水中の酸素がなくなると、悪臭や魚の大量窒息死などの問題が発生します。BODの数字が大きいほど水中に汚れの原因となる物質が多く存在するという事で、水質汚濁の指標と言われています。インターネットで検索をすると、多くの自治体が生活排水について情報を発信しています。私の住む自治体のページでもBODの数値を知ることが出来ました。

かつての日本は、産業排水による水質汚染が社会問題になっていましたが、法律や法令などで処理方法が適正にされるようになり、現在の水質汚染の原因は生活排水が多くを占めています。私たちが利用した水は川や海へ流れ、再び私たちのもとへと戻ってきます。

広大な海洋を巡り、蒸発し、地球上のどこかで雨となって降り注ぐことでしよう。私たちの生活はこの大きな循環の環のなかにあるのです。地球上の動植物がこの環のなかで水を利用しています。将来にわたって利用できる水をまもるために、大切に使うだけでなく、できるだけ汚さずに戻すという姿勢が大切なのだと思います。きれいな水を使うことが出来るということは幸せなことです。誰かの知恵と努力で得られる当たり前ではなく、水を利用する全ての人々にとって、地球を満たす水を護ることに貢献するという行動が当たり前になれば、地球温暖化による水不足や洪水などの気象に関する課題を解決することにつながるのはです。ガガーリンが見た青い地球、そして今私たちが暮らす地球、私たちのこれからの行動が未来の青い地球を創ります。

水への感謝、忘れていませんか。

和歌山県立向陽中学校 二年 河本 乃空 かわもと のあ

「やばいで、水止まるって。」

二〇二一年一〇月三日、速報のニュースを見て、私は祖母に急いで報告した。和歌山市の水管橋が崩落したのだ。

崩落した六十谷水管橋は、和歌山市北部へ水道水の供給の可能な唯一の施設である。再びニュースで、「断水」の恐れがあるため水をためなければならぬ、と言っていて、私は急いで水をためた。

その時はまだ水が勢いよく出ていた。そして早くお風呂に入り寝る支度も早く済ませた。どんどん水が弱くなっていき、次の日には完全に水が出なくなっていた。その日から、水の節水生活が始まった。トイレはできるだけ少量の水を使って流し、電子レンジで温めるとできるご飯を使った。

スーパーに行っても、水不足だけあってほとんどのお店で水が品薄状態だった。母の会社は断水にならない地区だったため、会社からたくさん水を汲んできてキャンピングトレーラーに入れ、その水をお湯にしてシャワーとして使った。時々温泉に行ったが、そこもすぐく混んでいた。みんなが水不足に困っていたのだ。

次の日には、私の小学校が給水場所になっていることを知り祖母と大きいタンクを抱えて、水を貰いに行った。学校は信じられないほどの大行列で、近所の人や同級生がたくさんいた。私達もその列に並び、自分たちの番が来るのを待っていた。給水車には「大阪府」や「兵庫県」と書いてあって、その前ではボランティアでペットボトルを配ってくれている人たちがいた。祖母は

「私たちのためにこの人たちは来てくれてるんだから、感謝しないとね。」と笑顔で言っていた。私は本当にそのとおりで思った。まだ数日しか経っていないのに、こんなにしんどくて辛いということを彼らは理解してくれてるんだと思い、嬉しかった。

帰ってきてから少量の水を一口だけ飲んだ。

以前は断水している地域があってもそれほど気にはいなかったが、きつとそれは被害者の方々の辛さがわかっていなかったからなのだと思う。今ではその辛さがよくわかる。水はそれだけ人間の生活に深く関わっていて、なくてはならないものなのだ。

それからしばらくして、水道から水が出るようになる、というニュースを見て、私達家族はすごく喜んだ。蛇口をひねってみると勢いよく水が出てきて、やつと思いつき顔を洗うことができた。

私はコップに水を入れて一気に喉に流し込んだ。

私はこの経験から水があることの「ありがたさ」を改めて実感した。皆さんが、今蛇口をひねったら水が出てくるだろう。でも、それが止まったときのことを考えたことはあるだろうか。水があることが「当たり前」になっっていないだろうか。私は当たり前になっただけで、いざ水が止まるとなると、とても焦ってしまった。だから「もし水が止まったとき、自分たちは何をすべきか」を一度考えてみるべきだと思う。

今、水が簡単に手に入ること、水を一気に喉に流し込めること、お風呂であたたまることができること。その全てに感謝して日々を過ごしていこうと思う。

私たちができること

和歌山県立向陽中学校 二年 久堀 優衣

二〇二四年一月一日、テレビを見ているとそこには見たことのない景色が映し出されていた。建物はほとんど崩壊していて、ところどころ赤い炎が見えた。「津波が来ます。今すぐ逃げてください。」とアナウンサーが必死に何度も呼びかけ、止むことのない地震の情報。中継画面のなかはまるで日本ではないようで、本当にこんな事が起きているなんて信じられなかった。能登半島地震である。

それから何日もニュースで取り上げられる中、とても困ったことが起きていた。それは断水だ。今回の地震により、水道施設が大きなダメージを受けた。また、珠洲市では川から水を浄水場に送る大元の導水管が壊れてしまったのだ。そのため、地震発生直後県内ではおよそ十一万戸が断水したという。水は人間が生きていくにあたって必要不可欠だ。自分の生活を振り返っても、一日の内で必ず水を使っている。朝起きて顔を洗うとき、洗い物をするとき、洗濯をするとき、お風呂のときなど、いざしたら切が無いほどだ。

私が住んでいる和歌山県でも過去に断水があった。近所の友達は、「水が止まるみたいだから、水をたくさんためておいたほうがいい。」と急いだ様子で私に伝えた。私は理解が追いつかなかった。「水が止まる？ほんの数分前だっただけ使えていたのに。」そんなことを思いながらテレビをつけると、見覚えのある橋が崩壊していた。水管橋だ。ニュースを見てやっとな理解できた。家族で協力して家中の水をたくさんためた。それから数日はとても不自由な生活が続いた。お皿の上にラップをして洗わなくてもいいようにしたり、顔を洗うのも、歯磨きをするにも、使う水の量を最小限にするよう

工夫した。特に困ったのはお風呂と洗濯だ。近くの温泉まで行ってぎゅうぎゅう詰めで湯船に入る。とてもじゃないけど温泉で疲れを取ることなかでできなかった。洗濯は橋本に住んでいる祖母の家まで行って洗濯機を借りた。往復およそ一時間半。運転をしていた母はとても大変そうだった。このような経験をしたから、水の大切さはよく分かる。

地震のあった能登半島。私達も紀伊半島に住んでいる。そして、和歌山県では大きな被害が出ると言われている南海トラフ巨大地震。最大震度七と予想され関東地方から九州地方にかけての太平洋沿岸の広い地域に十メートルを超える大津波の襲来が予想されている。安全なところへ逃げたとしても、断水は必ずと言っていいほど起こるだろう。そのときに備えて、今のうちから水や食料を備蓄しておく必要があると考える。人は水と睡眠さえしっかりとしていれば、たとえ食べ物が無かったとしても二〜三週間は生きられるそうだ。つまり、それほど水は大切だということ。南海トラフ地震への備えは一週間の備蓄が望ましいといわれているので一度家で確認してみようか。また、和歌山県で起きた断水、能登半島地震による断水の大きな原因は老朽化である。厳しい財政状況ではあるが、定期的な点検、修復工事などを行って地震による断水事故が減ればいいと思う。

水は私達が生きていくために必ず必要だ。過去に和歌山県、能登半島で起きた断水での教訓を生かし、劣化インフラの更新、水や食料の備蓄を行ってほしい。

次世代への贈り物

和歌山県立向陽中学校 二年 白倉 悠成

しらくら ゆうせい

私は生まれた時から自然豊かな町である広川町に住んでいます。広川町というだけあって「広川」という川があります。この川の上流は特に水が透き通っていて、春には桜、夏には川遊び、秋には紅葉と季節によってそれぞれ違う顔を見せてくれます。

私は、小学校六年生の遠足に、広川の上流津木地区に行きました。今まで見た川よりも広川の川の上流の水は格段に透き通っていました。川底の石の一粒一粒が鮮明に見え、魚も目視できるくらい水が透き通っていました。あまりに川の水がきれいなので、私はズボンをめくり上げ、裸足で川に入ることにしました。川の水は想像以上に冷たく、

「うわー冷たい。」

と友達と笑いながら水を掛け合いました。全身びしょ濡れになったので、河原に寝そべり、上を見上げました。すると、木々の隙間から日の光が差し込んでいて、とても神秘的でした。お弁当を食べた後、もう一度川に戻った私達は、数人がかりで大きな岩をどかし、どんな生き物がいるのか探しました。すると、きれいな赤色の甲羅のカニがいました。見たこともないカニに、私達は興味津々でした。かごに入れて、先生にカニのことを尋ねてみると、先生は

「サワガニやな」

と教えてくれました。家に帰ってサワガニについて調べてみると、サワガニ科に分類される日本固有種のカニで、本州から四国、九州の屋久島までのきれいな溪流や小川の上流から中流にかけて多く生息するカニだと知りました。

広川町の一番の自慢はホタルです。広川の上流にはゲンジボタルが生息しています。私の家では毎年、五月の下旬から六月の上旬の梅雨前にかけて津木地区にホタルを見に行っています。無数の黄緑色の光が宙を舞う姿は巨大なクリスマスツリーのようにとても幻想的で、時間を忘れてずっと見ていたい気持ちになります。この地域でホタルを見ることは私にとって「あたりまえ」だと思っていました。

調べてみると、昭和四十年代、広川でホタルを見ることはそれほど珍しくなかったそうです。しかし、昭和五十年代になるとホタルはたちまち姿を消してしまっただけです。やはり、河川の水質汚濁が原因で生息数が減ったと分かりました。そこで、地元の中学生たちが、「町のホタルを取り戻そう」と川の清掃に乗り出し、人工的にホタルを飼育、放流し始め、それから六年後に広川の中流域で初めて百五十体以上のホタルが確認されたそうです。私は、「川にホタルがいるのは当たり前」と思っていました。川をきれいにしてくれている人達がいることで、初夏の風物詩が守られているのだなと思いました。

川に入って水掛け合戦ができるのも、幻想的なホタルを見ることができると、川がきれいでないとできません。人がたくさん住んでいる広川の下流では人が捨てたペットボトルや飲食ゴミを見ることがあります。残念ながら、私は海岸掃除をすることはあっても、川を清掃しようと思ったことがありませんでした。川の清掃活動にあまり意識がなかったのです。次の世代、またその次の世代の子どもたちがホタルを見られるように一人一人が今よりも意識して川をきれいにすることが大切だと思います。今年もホタルが見られることを心待ちにしています。

水と共に歩むために

和歌山県立向陽中学校 二年

田中 花佳

たなか はなか

私の趣味は散歩である。そんな私が散歩をする場所は、家の近くに広がる田畑の周りである。私の家の周りには田が広がり、用水路が張り巡らされている。用水路は冬場で水が一滴もない時期もあれば、稲作をするために大量の水が勢いよく流れ続けている初夏から秋までの時期もある。そう、その用水路は稲作のための水を届ける専用の水路である。そんな用水路にはメダカの群れやシジミの貝殻、日本固有のタニシから外来種であるスクミリンゴガイといった生物まで幅広く生息していることが、目測でも確認できる。

私の祖母は私が生まれる前から農作をしてきた。私が用水路のことを話すと昔の用水路の話をしてくれた。「今は農薬を使っている、用水路にも農薬が流れ出ているから、食べられないけれど、昔は化学薬品も使っていなかったから、用水路に生息していたシジミを採ってよく食べていたよ。」今は、生物を採る際は数多くの決まりがあるため、簡単には採れないがもし採れたとしてもこの用水路には化学薬品が流れているかもしれない。私は初めてこの用水路は汚染されている可能性を知った。私が目で見てきた用水路は濁りもなく透明で、決して汚染されているなんて見えなかった。だが、この水は化学薬品や肥料の流出によって、決してきれいではないのだと、祖父母の話聞いて思った。

だが、そんな現状があり、農作をするときに化学薬品や農薬と呼ばれる人工的な薬の使用を抑えようという考えが、世界から日本へこの頃伝わってきた。水はすべての自然のもとである。そんな水を農薬は汚し、自然を壊す。当時の日本は世界的に見ても農薬の制限が緩かったため使用量も多

いと報告されるようになり、日本も農薬を減らすはたらきが強くなった。しかし、農薬の大量使用に規制をかけていなかった一九四八年以前よりは使用量も減ったが、いまだ日本は世界で農薬使用量が多い国として知られている。そのことを知った国民の私達は水や自然を守るため使用をより減らすべきだと農家や国に働きかけたりする。努力は農作をしている生産者の方だと、私達消費者は思っている。だが、農薬の使用を促してしまっているのは消費者の私達ではないか。私達消費者は買った作物の形が不揃いだったり、虫が食べた跡や虫がついていたら、嫌な気分になり、損をした不満だと感じる人も少なくないだろう。それを防ぐために農家の人たちは農薬を使うのではないか。私達の要求に答えるためではないか。

農薬だけではない。私達は自分の暮らしをより快適にするため、自分たちの要求に答えるために工業の発展や、様々な実験により河川、海の水を汚してきた。そう私達の要求により水を汚してきた。農薬の使用も、私達消費者が無農薬の農作への理解があれば、稲作であれば合鴨農作などが広がるはずである。今の水を守るには私達消費者の認知、理解が必要なのではないか。私は少しずつでも水を守るために理解を深めようと思った。また、理解の輪を広げるために発信する側となり、より日本が水を大切に、水に寄りそい共に歩んでいく国にしたいと思った。

いつもの川

和歌山県立向陽中学校 二年 玉置 凜音

たまき りのん

皆さんが住んでいる地域には川はありますか。また、川の役割や危険性を知っていますか。私が住んでいる地域には川があります。近くに川があり、川について知っていたほうがいいと思ったので調べてみることにしました。すると、川には主に三つの役割があることがわかりました。一つ目は、洪水による被害を防止する治水。二つ目は、飲水や農業用水などの生活を支える利水。三つ目は、自然・生物などの保全で生活を潤す環境です。それを知り、私がいつも見ている川を思い浮かべました。すると、農業用水に使われていたり、川に生物が住んでいるなど思いました。しかし、川にはこのような良い面だけでなく、悪い面も存在します。

それは、何年か前の大雨のある日のことでした。私達小学生は、いつものように学校へ登校し、授業を受けていました。しかし、昼になるにつれ、雨は激しく降っていききました。そして、午前の授業を終え、給食の時間だと思ったのですが、大雨警報により、家に帰ることになりました。私は、友達と「早く帰ることができて、ラッキーだね。」のように、早く帰ることに対して、喜びを隠せずにいました。帰りの車で、お母さんと「川がすぐく濁って、流れが速いし、危険だね。」と話をしていました。そして、家に帰りゴロゴロしていると庭に雨水が溜まっていることに気が付きました。どうしても気になったので、庭に出てみることにしました。庭に足を踏み入れました。すると、足が足首の上まで浸かってしまいました。そのことに私は驚きのあまり友達に「雨、思っていたよりすごいね。」と連絡しました。すると友達から窓からの川の状況が送られてきました。それは、一瞬にして、私を恐怖に陥らせるものでした。そこには、氾濫したいつも見て

いる川がありました。それを見た私は、すぐにテレビをつけました。すると、友達から送られてきたような氾濫し、いつもの姿では想像もできないような、荒れた川が映し出されていました。恐怖で川のことしか考えられなくなった私は、氾濫について調べることにしました。すると、いろいろなすべきことが出てきました。しかし、今の私には落ち着く以外にできることはありませんでした。落ち着くことにした私は、普段通り過ごしました。

翌日になり、友達と昨日の川の氾濫について話しました。「誰も怪我しなくてよかったね。」のように、安心していました。だけど、氾濫もいつでも起こるかかわからないし、近くの川を知り、避難場所を知っていくことも大切だと思いました。

この出来事から私は、川や海などの水資源とうまく付き合っていくことが大切だと思いました。例えば、このような出来事で川って怖いなんて思うだけではなく、川がなかったらなど、最初にも書かれたことのような役割を考えて、大切な資源の一つだと考えたとよいと思います。日頃私達は、「水」があるからこそ生きることができているのだと思います。ですから、限られた水資源を大切に、水害のことも考え、支えあっていくことでうまく付き合っていくことができると思います。

川を守るために

和歌山県立田辺中学校 三年 正木 寿佳
まさき ひさか

私の父と母は山奥の宿泊施設を経営している。普段の施設内はとても静かで、鳥のさえずり、木々のざわめき、ざあざあと川の流れる音が響き渡っている。こんな大自然に囲まれた宿泊施設に、特に夏にはたくさんのお客様がいらつしやる。家族、カップル、大学のサークルなど様々だが、どのお客様にも大人気なのは私たち家族自慢の、美しい川だ。どの川よりもきれいだ、という自信がある。川底の一つ一つの石がくつきりと見え、アユやアマゴなどの川魚もたくさん生息しているため、宿泊のお客様だけでなく、釣りのためにいらつしやるお客様も少なくない。夏でも川から叫び声が聞こえてくるほど冷たいが、それでも泳ぐお客様で川はいっぱいだ。

ある夏休みの日、両親の手伝いをしていたときに、川から上がってきたお客様が、

「この川はすぐきれいだし、冷たくて気持ちがいいね。」と笑顔で話しかけてくださった。その言葉を聞いたときに、思わずにんまりした反面、たくさんの人に喜んでもらえるこの川を守り続けるためにはどうしたらよいだろうか、とふと思ひ、真剣に考えたことがある。その後もうどうしても気になっていたので、家に帰ってから現在の川の汚染について調べた。

まず、川の水が汚れる原因として、自然によってもたらされる汚染と、人間の行動による汚染の二種類がある。自然による汚れ、例えば動物のフンや死骸は、大した影響は与えないらしい。しかし人間の行動によってもたらされる汚れは川に大きな影響を与える。例えば川に捨てられたゴミ、洗剤の使い過ぎ、油をふき取らずそのまま洗う、などの人間の行動による

汚れは、川の汚染の約九割を占めているそうだ。

このことを知ったとき私はぞつとした。ゴミなんて絶対に捨ててはいけなし、洗剤の使い過ぎや油をふき取らないことは環境に悪いことだともちろん理解していたが、まさかそれらが川の汚染の原因の九割をも占めていることにぞつとしたのだ。私たち人間の日常生活の何気ない行動で美しい川も汚れた川へ変貌してしまう。もしかしたら今はきれいな川だが、いつかお客様に、

「もつときれいだと思っていたけれど、汚くてびっくりしました。」なんて言われたら、泣いてしまうかもしれない。

そんなことを言わせないために、よく注意して生活してみようと考えた。食器洗いの洗剤は環境にやさしいものを選び、使い過ぎないように洗う順番を変えたり、フライパンなどの残った油は使用済みのティッシュで吸いとつたりと、自分ですぐ行動に移せそうなことから始めてみた。時には母が食器を洗う時に声をかけてみた。私だけが意識するだけでは当然汚染が止まるわけではない。だから少しでも多くの人に、意識してみようよ、という思いが伝われば、急に変化はしなくとも、確実に汚染問題の解決に向かっていると思う。

私はいつまでもきれいで、お客様に喜んでもらえるように今の川を守りたい。そのために今後、川の環境に意識を向ける人が増えるように、自分たちが川を守るためにできることなどをSNS上で発信していきたいと思う。いつか日本国内を超え、世界中の川の汚染を解決できる未来を創りたい。

ジュースの蛇口が欲しい

和歌山県立田辺中学校 三年 湯川 ゆかわ あづ

水とは水道の蛇口をひねれば出てきて、そのまま飲んでも害はない、それは当たり前のことでした。できればジュースの出る蛇口なんかがあればいいななんて考えていました。

海外の方が日本に旅行に来た際に一番驚くのは、飲み水が安全なのもちろんのことその美しい水でトイレを流すことだと聞いたときは心底驚きました。海外からすれば良い意味で常識外れの国、そのくらい日本は安全で美しい水が豊富です。でも、広い世界の様々な国では、ボランテアによつて井戸を掘って、なんとか掘り当てたとしても安全な水ではないのでそれを飲んだために病気になるってしまったり、時には命を落としてしまうなんて事さえ珍しい話ではありません。

私は小学生のとき夏休みに科学の作品コンクールに参加しました。山の湧き水を再現しようとペットボトルを使つてろ過器を作りました。ペットボトルを切った物を重ねて口が細くなった方に脱脂綿、小石、備長炭などを順番に詰めて上から泥水を流し入れてろ過するという物です。小学生だった私は、きつと水道から出てくるような透明な水を想像していたのでしようが、出てきたのは汚く濁って到底飲めるような物ではありませんでした。それでも水に恵まれていない国では、きつと井戸を掘り当てた喜びでこれくらい濁りなら飲んでしまうのかもしれないと受け止めます。

最近テレビのサバイバル番組なんかで、簡易的なろ過器などもあるのを目にしました。水不足の国の人全員にきれいで安全な水を行き渡らせようとなると膨大な数が必要になります。

二〇二四年一月一日能登半島地震が世間を揺るがしました。能登半島地

震で被災した方々に話を聞いたという記事を読むと被災して大変なことのベスト三に水不足、だと載っていました。私達和歌山県民にとって近い将来最も恐れられていることは、今後三十年以内に必ず来るといわれている南海トラフ地震です。被災した場合のために飲み水を備蓄したりしていますが、実際に被災したとき備蓄した水だけで何日過ごせるか分かりませんが、その時私達は本当に水のありがたみを知ることとなるのでしょうか。

震災だけではありません。地球温暖化で雨がたくさん降る地域と降らない地域が極端に分かれる時代が来ると先生の先生が言っていました。そうなる水と水を巡って戦争なども起きるかもしれません。実際日本の山はほとんど中国人に買い取られているそうです。山があれば湧き水が出てきて水に困らないからでしょう。特に日本という温暖湿潤気候のおそらく極端に雨が降る側の国の山は貴重ですからね。

地球にはたくさん水があるように見えて今すぐ飲める水は〇・〇一パーセントしかないそうです。しかも淡水に限られています。サウジアラビア付近では海水を真水に変える技術があるみたいですが、実は温室効果ガスが大量に排出されるデメリットが大きすぎて問題となっているそうです。世界中の人が満足に水を飲んだり使ったり出来るようになるにはどうしたらいいのでしょうか。

中学生に出来る事など何も無いように思いますが、せめて環境を破壊しないように日々の生活の中でリデュース、リユース、リサイクルなどの努力をすることや、世界の国の環境保全の取り組みに目を向けて色々なことを学ぶなど出来る事はたくさんあります。自分一人では何も変わらないけど、一人が毎日一以上一〇一の努力をすれば一年間で二十七・八になり、〇・〇九だと〇・〇三になる」という考え方のように世界中の人々が努力を重ねてくれればきつと環境は改善され良い未来が待っていると思います。私も〇・〇一でも多く環境保全に努め、いつか蛇口からジュースが出る時代を創りたいです。

第46回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

第48回「水の週間」の行事の一環として実施された作文コンクールの概要は、次のとおりです。

1 応募要領

- ①テーマ・・・「水について考える」（題名は自由）
- ②対象・・・中学生（中学生と同じ年齢の方を含む。）
- ③原稿枚数・・・400字詰め原稿用紙4枚以内、日本語で表記された個人作品に限る。
題名・学校名・学年・氏名（ふりがな）を記入する。
- ④あて先・・・和歌山県庁 地域振興課
〒640-8585 和歌山市小松原通1-1
TEL 073(441)2423
- ⑤応募期間・・・令和6年5月9日締切り
- ⑥版权等・・・○応募作文は自作の未発表のものに限る。
○応募作品の著作権は、主催者に帰属する。
○応募作文の返却は行わない。

2 応募結果

応募 学校数	応募 総数	学年別		
		1年	2年	3年
校	編	編	編	編
13	759	264	382	113

3 審査

和歌山県審査において、優秀賞3編、入選5編、佳作10編あわせて18編の入賞作文を決定。

(協力 和歌山市中学校国語教育研究会)

4 表彰

(1) 賞および賞品

賞	賞品
優秀賞	賞状、図書カード
入選	賞状、図書カード
佳作	賞状、図書カード

(2) 表彰式

優秀賞の受賞者を令和6年8月6日、和歌山県庁において表彰

